

大内秀明、一つのモリス・ボックス論

－ モリス・ボックス『社会主義』における注記をめぐって －

田中 史郎

はじめに

大内先生の提案で、モリス・ボックス『社会主義』の翻訳研究会が開催された。メンバーは、大内先生、吉村典子氏*1、矢元祥子氏*2、田中の都合4名で、2011年2月頃から準備に入った（実は、第1回の研究会が「3.11」に予定だったが、大震災のため当然にも延期となった）。その後、翻訳研究会は、震災の後片付けをしつつであるが、5月頃からほぼ毎週、各章を2から3回で消化するというペースで行われた*3。

大内先生がすでにかかなりの部分を訳出していたので、それをベースに内容そのものの吟味をしつつ、検討と翻訳が進められた。そして、すべてが終了した後で、前半を吉村氏が後半を田中がとりまとめ、さらにその原稿を基に川端康雄氏が完成稿とし、2014年に出版に至った。

この研究会では、大内先生の提起が多いが、翻訳の域を超えて実に多岐にわたる議論がなされた。そうした中で本稿では、きわめて重要を思われる、一つの「注記」について検討してみたい。以下、敬称略。

1. モリス・ボックス『社会主義』

本題に入る前に、本『社会主義』について、若干の説明をしておく。本書は、W.モリスとE.B.ボックスとの共同執筆で、もともと社会主義同盟（Socialist League）の機関誌『コモンウィール』（Commonweal）に連載されたものだ。その後、それが整理され1冊の著書として出版された。（なお、前者と後者の区別が必要な場合には、前者を「論文」、後者を『著書』と呼ぶ。その必要がない場合には、『社会主義』とする。）

「論文」のタイトルは *Socialism: from the Root Up*（社会主義—その根源から）*4となっていたが、『著書』では *Socialism: Its Growth and Outcome*（社会主義—その成長と帰結）*5とされており、また、章別構成も「論文」では全23章だが、『著書』では全21章に整理されている。また『著書』には、「序論」および「都市」についての覚書が加えられている。その意味で若干の差異があるが、今回取り上げる問題に関しては、「論文」、『著書』も同一である。

*1 英文学科教授。

*2 英文学科副手。

*3 私事だが、2011年度はサバティカル期間であったので、不幸中の幸いであった。

*4 「社会主義」は、『コモンウィール』に1885年から88年まで連載された。途中で中断時期があり、ほぼ3年の期間が費やされている。

*5 『社会主義』は、1893年に刊行された。

『社会主義』は、古代から現代まで、大胆に歴史をたどるスタイルで社会主義についての諸問題が展開されている。だが、第17章「<ユートピスト>たち—オウエン、サン・シモン、フーリエ」、第18章「<ユートピスト>から近代社会主義への移行」では社会主義学説や社会思想的な問題が、また第19章「科学的<社会主義>—カール・マルクス」では正面からマルクス『資本論』が検討され、さらに最後の2章では今後の方向性が明確に示されている*6。

かねてから、本書は、『ジョン・ポールの夢』*7、『ユートピアだより』*8とともに**3部作**といわれてきた。だが、前2著の日本語訳はそれぞれ複数あるものの、『社会主義』の翻訳はこれまでなかった。これまでのモリス研究はどちらかといえば、特に戦後は、文学や美術史の研究者によってなされてきた。そのような事情もあって、本書の特に後半部分にはマルクス『資本論』などの検討も行われているので、文学や美術を専門とする人々には敬遠されたからではないかと想像される。

やや蛇足だが、日本でもっとも早く『資本論』を紹介したのは**山川均**であるといわれる。山川が『大阪平民新聞』（1907年）に掲載したものだが、それは『コモンウィール』に連載された『社会主義』（「論文」）に依拠するものであった*9。ほぼ正確な内容紹介であったといわれている。

『社会主義』は概ね以上のような著作だが、その第19章にきわめて重要な「注記」が施されている。この点は大内によってすでに指摘されていることでもあるが*10、再度検討に値する。

*6 本『社会主義』の成立事情や詳細な解説に関しては、本書の「付論1」（大内）、「付論2」（川端）、「解題」（大内）を参照されたい。本書を理解するための参考になる。

*7 「ジョン・ポールの夢」（*A Dream of John Ball*）は、『コモンウィール』に1886年～87年まで掲載。単行本『ジョン・ポールの夢』は1888年に刊行。なお、日本語版には『ジョン・ポールの夢』（生地竹郎訳、未来社、1973年）、『ジョン・ポールの夢』（横山千晶訳、晶文社、2000年）などがある。

*8 「ユートピアだより」（*News from Nowhere*）は『コモンウィール』に1890年から約1年間、連載された。単行本『ユートピアだより』は1891年に発行。「ケルムスコット版」（モリスが創設した工房）は1893年に刊行。なお、いわゆる海賊版も出版されている。なお、日本語版には、『理想郷』（堺利彦訳、平民社、1904）、『無可有郷だより』（布施延雄訳、至上社、1925年）、『地上楽園』（矢口達訳、国際文献刊行会、1926年）、『無可有郷通信記』（村山勇三訳、春秋社、1929年）、『ユートピアだより』（松村達雄訳、岩波文庫、1968年）、『ユートピアだより』（五島茂・飯塚一郎訳、中央公論新社、1971年。後に、中公クラシックス（新書版）としても出版、2004年）、『ユートピアだより』（川端康雄訳、晶文社、2003年）、『ユートピアだより』（川端康雄訳、岩波文庫、2013年）、などがある。

*9 この点に関しては、大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義』（平凡社、2012）の89頁以下を参照。

*10 前掲の『ウィリアム・モリスのマルクス主義』の111頁以下を参照されたい。また、この問題は、『社会主義』「付論1」においても、触れられている。

2. 『社会主義』、第19章の「注記」

モリス・バックスが問題としたマルクス『資本論』の当該箇所をまず提示し、そして、「注記」の問題を検討する。

『資本論』の第1巻、第7篇、第24章、第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」には、以下のような一節がある。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえまた**資本主義的な私的所有**は、自分の労働にもとづく**個人的な私的所有**の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定（第2の否定）は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする**個人的所有**をつくりだす。すなわち、協業と土地の共有と労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする**個人的所有**をつくりだすのである。」（『資本論』第1巻、『全集版』995頁）

これに対して、モリス・バックスは、上の「第一の否定」の部分に「注記」を施し、次のように述べている。本書においては、全体として注記は多くなく、また、この注はやや消極的な表現にも感じられる。必ずしも『資本論』を正面から批判するような書きぶりにはなっていないが、その内容は本質に迫っている。

「ここで使われているような語句を誤解しないことが大切である。＜中世期＞における労働は、機械的な側面では個々別々に行われていたのだが、精神的な側面からみれば、協同（アソシエーション）の原理によって、きわめて明確に支配されていた。すでにみたように、その時代の「親方」は単なるギルドの代表にすぎなかったのである。」（『社会主義』197頁）

さて、何が問題か。『資本論』から考察しよう。この部分は、日本の資本論研究においても、「否定の否定」論や「領有法則の転回」（所有法則の転変）論として多くの議論を呼んだところだ。

『資本論』の当該部分の解釈として、通説的には概ね以下のように理解されてきた。すなわち、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」*11として3つの段階があり、それらが「否定」という関係で論理づけられている。まず第1に「**個人的な私的所有**」があり、第2にその否定として「**資本主義的な私的所有**」があり、そして第3にさらにその否定として「**個人的所有**」がある。第1の否定として第2が成立し、その第2の否定（つまり否定の否定）として、第3が成立する。したがって、この第3段階は、第1の高次元の復権と位置づけられている。

つまり、第1の段階の「**個人的な私的所有**」の「否定の否定」として第3段階の「**個人**

*11 既述のように、『資本論』、第1巻、第7篇、第24章、第7節のタイトルである。なお、モリスが熟読したのは『フランス語版・資本論』だが、それは『ドイツ語版・資本論』とは若干篇別構成が異なっており、当該箇所は、第8篇、第32章になる。『フランス語版・資本論』は、読みやすさを考慮し、44分冊で刊行されたということもあって、「節」が「章」にいわば格上げされて整理されているとも考えられる。

的**所有**」を展望するという論理構成になる*12。

むろん、やや注意深く読めば、通説的理解とは異なる解釈もできる。すなわち、まず、第1の「**個人的な私的**所有****」と第3の「**個人的**所有****」という表現に、内容的な差異があるかどうかの問題がある。また、第3段階の個人的**所有**という文言の前に、「私的**所有**を再建するわけではないが」や「協業と土地の共有と労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする」という形容句がある。私的**所有**再建の否定や、土地の共有、生産手段の共有ということが示されているので、それを重視すれば、第3の段階として単に「**個人的**所有****」を強調するのは、やや強引な読み込みかもしれない。

しかし、ともあれ、音楽でいう「三部形式」を思わせる、「否定の否定」論は、それゆえ、第1段階を如何に捉えるかによって、未来社会＝社会主義がどのようなものかを展望するという構造になっていることは間違いなからう。

そこで、改めて第1段階の規定が目される。ここでも注意深く読めば、「**個人的な私的**所有****」の前に、「自分の労働にもとづく」という形容句がついている。

この点にモリス・バックスは、異を唱えたのだ。つまり、マルクスによれば、第1段階は「自分の労働にもとづく**個人的な私的**所有****」とされたが、彼らによればそうではないという訳だ。

モリス・バックスによれば、その時代においては、既述のように「労働は、機械的な側面では個々別々に行われていたのだが、精神的な側面からみれば、**協同（アソシエーション）**の原理によって、きわめて明確に支配されていた。」と強調している。

この時代（前資本主義）の労働を分析すると、「機械的な側面では個々別々に行われていた」といえ、その意味で「自分の労働にもとづく...」ということもいえなくもないものの、「精神的な側面からみれば、**協同（アソシエーション）**の原理によって、きわめて明確に支配されていた」と断言している。

つまり、モリス・バックスは、第1の段階での労働の有り様を「**協同（アソシエーション）の原理**」に基づくものと理解し、それを前提として第3段階を展望するという構造を維持しているといえる。そうだとしたら、その第1段階の「否定の否定」、すなわちその復権は「**個人的**所有****」ではないということになる。それは、「**協同（アソシエーション）の原理**」の復権を意味することに他ならない。

これは、先に示したように、第3段階の個人的**所有**の前に置かれた、「協業と土地の共有と労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする」という形容句を重視する観点に通底するものかもしれない。

要するに、「前資本主義」－「資本主義」－「未来社会」という図式の中で、「未来社会」を「前資本主義」の復権とするならば、「前資本主義」の内容の規定が重要な意味を持つ。つまり、「前資本主義」の内実を「**個人的な私的**所有****」と理解するならば、その否定の否定である「未来社会」のそれは「**個人的**所有****」となる。しかし、「前資本主義」の内実を「**協同（アソシエーション）**」と理解するならば、その否定の否定である「未来社会

*12 日本では1960年代に、この部分を高く評価し社会主義を展望する「**市民社会派**」という学派も現れた。彼らは、資本主義的**所有**の否定である社会主義は、「共同**所有**」や「国有」ではなく、あくまでも個人的**所有**を再建することにあると考え、これをマルクスの真意であるとした。すなわち、当時のソ連型社会主義の国有企業や計画経済を批判したのであって、一定の影響力を持った。

会」のそれは「協同（アソシエーション）」の社会と把握されることになる。

モリス・バックスは、未来社会を「協同（アソシエーション）」の社会として構想していたと読み取ることができる。彼らは、「注記」といういわば限られた中で、やや控えめながら自らの、社会主義や労働についての構想を示したものといえよう。

実は、こうしたモリス・バックスの解釈に近い議論は、日本ではかつて宇野弘蔵によって提起されていた。

論文、「社会主義と経済学」*13において、当該部分を検討した宇野は以下のように述べる。

「したがって「資本主義的私有」なるものは、本来「自分の労働にもとづく」ものとしての「個人的私有」の「否定」をなすというよりは、私有制自身の完成をなすものである。／かくてマルクスのいわゆる否定に否定も、共有制を否定した私有制を否定するものとしてこそ、否定の否定をなすものといってよい。」（『著作集』第10巻、350頁）

みられるように、宇野は、第1に、資本主義的私有を私有制自身の完成とみる、そして、第2に、それは前資本主義が共有制であることを意味する、したがって第3に、その「否定」である未来社会は、「私有制を否定」した「共有制」として示すに至った。未来の社会を、私有制を否定する共有制に求めたのだ。

むろん、時代的にはモリス・バックスの方が遙か早い。とはいえ宇野がモリス・バックス『社会主義』を読んでいた形跡はない。

しかし、モリス・バックスも宇野も、時代を超えて、『資本論』のこの箇所に関しては同様な疑問を感じ、同様な解釈をしていたことは確かだろう。おそらく、この点に疑問を呈したのは『社会主義』が初めてのことと推察できる。そして、それを大内が発見した*14。経済学説史研究においても重要な発見である。

3. モリス・バックスの疑問の背景

では、モリスとバックスは何故にこのような「注記」を施したのか、その背景を探ってみよう。

『社会主義』においては、その前半で、古代社会や中世社会に関しての実証的な考察がなされていた。それを通して資本主義に至る全体像を確立していった。本稿と関連する記述を以下に示す。

「封建領主、家臣、その農奴の関係は、それ自体は単に中世社会の一面を示しているにすぎない。この時代のもっとも顕著な特徴のひとつは、社会内部で**協同（アソシエーション）**への傾向があったことである。じっさい、そうした協同なしには、その時代には何もできなかった。…<生産>や<交易>は、商業の保護や産業のために商人や職人によって

*13 本論考は、『思想』（岩波書店、1965年9月号）に掲載され、賛否両論を引き起こしたという。

*14 大内は以下のように述べている。「（『資本論』においては、）私的・個人的労働に基づく、私的・個人的所有という、資本家の生産様式に先行する商品生産の設定に問題があった。モリスは、それに気づいていたからこそ、あえて誤解を恐れての「注記」のスタイルで、それとなく自己の主張を提起したのではないのでしょうか。」（『ウィリアム・モリスのマルクス主義』116頁）

作られた複数の大きな**協同組織（アソシエーション）**の手中にあった。」（『社会主義』57頁）

モリスとバックスによれば、中世社会では、封建領主、家臣、その農奴の関係があるものの、それは「中世社会の一面」であって、社会における「協同（アソシエーション）」こそがその顕著な特徴であるということだ。彼らはこのような歴史認識を確立していた。すなわち、「否定の否定」の論理の出発点は、協同組織（アソシエーション）でなければならないということになる。

それゆえ、このような認識をもつモリスとバックスからすれば、前資本主義の時代は「協同（アソシエーション）の原理によって、きわめて明確に支配されていた。」（『社会主義』197頁）という指摘は当然であろう。こうして、その時代を、「自分の労働にもとづく個人的な私的所有」の時代として特徴づけるマルクスの文言に「注記」を付すに至ったと考えられる。

やや蛇足ながら、この問題に関して、モリス・バックスほぼ同様な見解を有している宇野は、土地所有をめぐって、以下のような理解を示している。先の「否定の否定」の論理の出発点について、モリス・バックスとは異なる例示からほぼ同様な見解を示している。

「...マルクスは、...資本の原始的蓄積...を「自分の労働にもとづく私有の解消」として出発している。しかし労働の対象乃至は場所としての土地は、いうまでもなく「自分の労働にもとづく」ものではない。しかも「自分の労働にもとづく私有」は、この土地の私有を前提とする。いいかえれば「自分の労働にもとづく私有」なるものは決して根源的なものではない。」（『著作集』第10巻、349頁）

みられるように、自己労働にもとづく私有という関係を、私有の根拠にすることはできない、少なくとも土地の私有は労働にもとづくものではないというわけである。そしてここでは詳しく述べられていないが、こうした土地の私有関係は、前資本主義ではなく、資本主義の確立とともに完成したものとされる^{*15}。

おそらく宇野にあっては、こうした土地をめぐる議論とともに、『資本論』就中『経済原論』の意義を問うという問題意識があったように思われる。資本主義経済の解剖学である『資本論』『経済原論』は商品から論が始まることから窺えるように徹底した私的所有の論理に貫かれている。資本主義こそが私的所有の完成であるということは強調されすぎることはない。それゆえ、それを踏まえれば、前資本主義や未来社会に、私有や個的所有を導くことはあり得ないことと考えられたのであろう。

したがって、資本主義を否定する未来社会は、「自分の労働にもとづく私有」などではないというわけだ。

やや異なる経路をたどりながらとはいえ、モリス・バックスと宇野がこの問題に関して、似たような結論に達していることに、意味があることは間違いない。さらに深い研究の必要があろう^{*16}。

*15 近代法における自由・平等という大原則は、人を身分や出自、権力から解放したが、土地をもこれらから解放したとされる。すなわち土地を使用したり処分したりする所有権を考え出した。近代＝資本主義によって私的所有が完成をみたといえる。

*16 実はこの問題はこれで終わらない。マルクスには、似たような論理がすでに存在している。それは、

まとめ

『社会主義』には、ここで取り上げた以外にも注目すべき点が多々ある。また、『ユートピアだより』などと併せて読むと味わい深い。『社会主義』がいわば研究書であるのに対して、『ユートピアだより』はあくまでも小説である。その意味で、書きぶりもまったく異なるが、モリス・バックスが、生涯をかけて追求した社会主義の運動と理論に触れることができよう。

『経済学批判』（1859年）の「序言」にある、いわゆる「唯物史観の公式」とよばれる記述だ。そこには、歴史の発展段階として、「アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョアの生産様式」があげられている。この図式と、ここで取り上げた「否定の否定」の図式はどのように関連するのか、定説があるわけではない。

例えば、「近代ブルジョア生産様式」（『経済学批判』）を「資本主義的生産」（『資本論』）と同じ意味だとすることには異論はなかろう。しかし、「否定の否定」論の、第1の否定の対象が、「アジア的」、「古代的」、「封建的」のどれなのか、あるいは全てなのか、はたまた、まったくの別物なのか、判然としない。また、「唯物史観の公式」には、「この社会構成（近代ブルジョア生産様式）をもって、人間社会の前史は終わりを告げる。」とあるが、これは「否定の否定」論の図式においてはどのように示されるのか、やはり判然としない。

さらに、昨今、柄谷行人『力と交換様式』（岩波書店、2022年）が話題を呼んでいるが、そこで示された、交換様式の「A、B、C、D」が、先の図式をどういう関係にあるのかも検討に値するだろう。